時評

東日本大震災と「心の花」②

藤島秀憲

昨年の六月号では、全出詠者五〇六人のうち一五六人がなんらかの形で震災を詠んだ（発生から締切までは十四日間であった）。一五六人の居住地を大きく分けてみると、次のようになる。

Ⅰ　東北地方に居住　九人
Ⅱ　関東地方に居住　七二人
Ⅲ　東北・関東以外に居住　七五人

もともと東北に会員の少ない「心の花」であるから、東北地方で被災した人の歌は当然少ない。その代り、関東地方に住む作者が強い揺れの瞬間を詠んだり、帰宅難民になった体験や計画停電の不便さを歌った作品があり、被災とは違う形式の震災の歌が多く生まれた。いつの時点を歌っているかによって歌を三種類に分け、それぞれの居住地から選んでみた。

A　揺れが起きた瞬間または直後を詠んだ作品

Ⅰ　ひび割れた玄関をぬけ全校の三十二名は雪の前庭へ　秋田　蓬田　真弓

Ⅱ　揺れの中次の行動選ぶことすぐ決められずこれは本番　東京　矢代　朝子

B　当日の夜または翌日を詠んだ作品

Ⅰ　ともかくも明日の新聞出すために夫出社せり雪降り始む　宮城　大口　玲子

Ⅱ　暖房も照明もなき体育館ラジオニュースの声のみ響く　茨城　田中　拓也

Ⅲ　Breaking News をロビーに立ち尽し見続けたる三月十二日　ベトナム　梅原ひろみ

C　数日後を詠んだ作品

Ⅰ　地震ののち五日目温きタオルにしばらく顔を埋めておりぬ　宮城　駒田　晶子

Ⅱ　滅ぶかもしれぬ世界にわれはゐて小さき人形作りて眠る　東京　野原亜莉子

Ⅲ　水欲しい、下着足りない、被災者の声が聞こえるこのドイツまで　ドイツ　小野フェラー雅美

AのⅠの作者は小学校教師、完結しない文体が緊迫感を伝える。AのⅡの作者は俳優、だから余計に「これは本番」が活きる。ぶつぶつ切れる荒っぽい歌い方に慌てふためく様子が出ている。BのⅠは新聞記者の夫を送り出した後の不安を結句の描写に託した。BのⅡの作者は中学教師、生徒と共に過ごす一夜をドキュメンタリータッチで描く。CのⅡは人形作りに夢中になることで虚無感と戦うしかない現実。海外の二作者は日本から離れ住むもどかしさを歌う。AのⅢに該当する歌はテレビを通しての歌が中心で、現場感覚に乏しく、体験した者の歌と並べることはできなかった。

・またひとり青きシートに包（くる）まれて瓦礫の中を運ばれにけり　宮城　和田　敏典

震災から約半年の八月二十五日が締め切りだった十一月号では二十九人が震災の歌を詠んだ。ただし、ほとんどが原発関連の歌。放射能が生活に及ぼす影響を歌っている。そんな中、和田の作品に注目した。和田は震災後はじめての出詠。歌わなければならないことを歌うためには半年の時間が必要だったのだろう。